# 第１０回　幸福師匠！おーえん会（報告）

令和 6 年 3 月 9 日（土）に岐阜市神田町の喫茶店星時で**「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」**が開かれました。「第 10 回幸福師匠おーえん会」は 7 人のメンバーが参加しました。

**〇登龍亭幸福師匠の一席目は、創作落語『落語で知る、かかみがはら』でした。**
**はじめに：**★江戸で一日限りの寄席「落語で知る、かかみがはら」が、今年 1 月 20 日（土）14:00～15:15 東京銀座（新橋のガード下らしい）のアンテナショップ「岐阜トーキョー」で「各務原市広報課」主催で行われました。ネタが、岐阜県以外ではあまり受けないと言う幸福師匠の気持ちから、今回、星時では 2 回目の一日限りの寄席となりました。
**あらすじ**：★各務原の怖い話し、都会人には信じ難い「人参、ヒコーキ、駄々広い広場」が話題となる都市は何処なのか？？？。何時でも人参が畑で引き抜けて、上空にはブルーインパルスが飛びまわり、野原には人気のない公園が在る所なんて、都会人に信じられない」と言ったストーリー展開だ。今回、我々は地元民なので、あれは何処だ、此処は行った事がある、間引き人参の葉は柔らかくて美味しいなどなど・・・、イメージが湧きすぎて臨場感のタップリの語り口でした。

**〇登龍亭幸福師匠の二席目は『たいこ腹』でした。**
**はじめに：**★「太鼓持ち」とは、「人に媚びへつらい、機嫌を取って好かれようとする人」のことを指します。多くの場合、相手を揶揄する際に使われます。しかし、実は「太鼓持ち」はもともと、宴会場を盛り上げる役割をする男性を指す言葉でありました。「太鼓持ち」は、自ら芸を見せたり、時には芸者や舞妓と共に、舞や踊りで客を楽しませました。この男性の職業は「幇間（ほうかん）」や「男芸者」とも呼ばれ、柳ケ瀬にも、今もお一人居られるとか。また「腰巾着」「鞄持ち」「ご機嫌取り」なども同じ意味合いを持っています。
**あらすじ**：★会社の上司や権力のある人に媚びへつらっている様子を見て「あの人は太鼓持ちだ」と揶揄することが多く、現在ではあまりいい意味では使われません。「幇間（ほうかん）」とは、もともとは宴会を盛り上げる言葉でした。

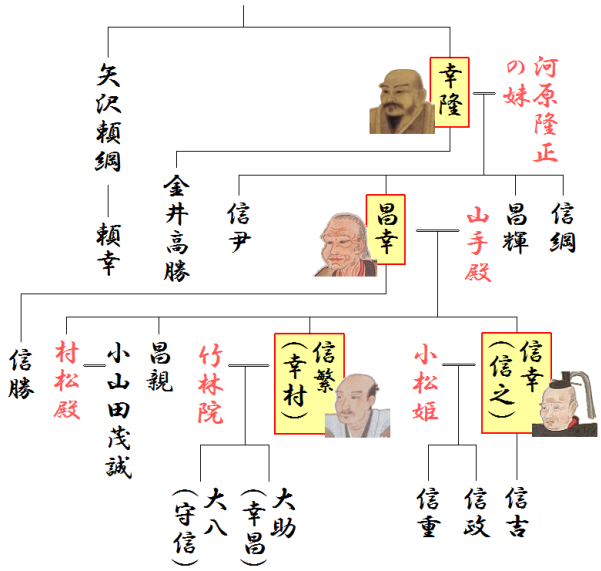
とある老舗の若旦那は、今まで挑戦した趣味を並べ、とうとう、やることがなくなってしまいました。そこで、今度とはばかりに心を入れ替えて善行に励もうと思い、鍼医の元に弟子入りして修業を始めました。しかし、畳や枕を相手に練習ばかりでいると、誰か人に試してみたくなるもの例外ではありませんでした。

普段は媚びへつらう太鼓持ちも、「鍼をうたせろ」と言う若旦那から慌てて逃げようとしますが、鍼一本につき 5 万円と新しい着物を進呈され、ついその気になって横になってしまいます。「目は嫌だ、あそこは嫌だ」と言う太鼓持ちの腹にとうとう針を打つ事になって仕舞いました。

しかし、鍼を刺されると予想外の痛みに飛び起き、針が折れてしまいます。若旦那は慌てて「迎え鍼」を打とうとしますが、これも同じ成り行きで折れてしまいます。若旦那は怖くなって逃走し、入れ違いで女将が現れます。事情を聞いた女将は同情しつつ、「貴方はこのあたりで打ち鳴らした太鼓持ち、いくらかにはなったんでしょ？」と尋ねます。しかし、その答えは意外で、「とんでもない！皮が破れて鳴りませんでした」。真っ赤になった腹が破れて、張り（針）が日本（二本）出てくる、とは・・・。

話の落ちは、欲の皮が張った太鼓持ちが、若旦那の針治療で欲の皮が破れた、とかでしょうか？

**〇旭堂鱗林師匠の講談は『真田の小松姫（こまつひめ）』**でした。
**はじめに：**★小松姫は徳川四天王の一人、本多忠勝の長女として生まれました。徳川家康の養女となり、上田城主である真田昌幸の長男の信之に嫁ぎました。弟には真田幸村がいます。信之は真面目で愛情深い人物であり、家族を守るために様々な選択を迫られました。彼の人生は戦国時代の厳しい状況の中で展開され、その名は歴史に刻まれています。その妻、小松姫も真田家の歴史において重要な役割を果たした女性であり、その名は脈々と受け継がれています。小松姫は信之の家臣たちと連携し、領国を支えました。信之が病気で出陣できない際には、長男信政と次男信重が戦場で活躍しました。信政は、後に信濃松代藩の 2 代藩主となりました。




真田家の家系図：『戦国ヒストリー』「真田信之（信幸）」幸村の兄は松代藩１０万石初代藩主となり、家名を明治期まで存続させていた！、より承諾を得て掲載しています。　http://sengoku-his.com /2024

<u>あらすじ</u>：★真田信之（別名：信幸）は、真田家の守り手であり、信繁（幸村）の兄でした。信之は、長男であり真田家の後継者として育てられ、上田藩の藩主として、父昌幸の跡を継ぎ、松代藩１０万石初代藩主となり、家名を明治期まで存続させました。幸村は次男であり、真田家の家督を継ぐことはありませんでしたが、家族として信之を支えました。小松姫は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した女性で、信之の正室でした。

兄弟のどちらかが生き残れば真田家も絶えないと考えた昌幸は、幸村と共に西軍の石田三成側に付き、一方で信之は東軍の徳川家康軍に付きました。小松姫が居たのが幸運でした。

真田家が分裂し、上田合戦で東西両軍に分かれました。後に真田昌幸が上田城に戻る際、幸村と一緒に沼田城に立ち寄りました。小松姫も舅の昌幸に会いたかったのかも知れませんが、城の門は厳重に閉ざされていました。小松姫は昌幸と幸村を城に入れず、甲冑姿で現れました。城内のすべての女性も甲冑を身に着け、長刀や弓槍を持って勢ぞろいしていたと言われています。父と弟が沼田城に入れなかった理由にはいくつか要因があります。昌幸は沼田城開門を願いましたが、真田親子兄弟は敵味方として戦っていたため、小松姫は生き残りをかけ両者を区別していたと考えられています。東軍の徳川家康側に付いた信之は、妻である小松姫が昌幸を断固として追い返したからです。「この城は真田信之の守る城。たとえお舅さまのご命令でも、城主信之の許しがない限り開門できませぬ」と、昌幸は諦めて、近くの正覚寺で休憩しました。小松姫は真田家を守り抜くために、その強い意志を示した瞬間であり、彼女の存在は真田一族にとって非常に重要でした。

東軍について関ケ原の戦いに勝利した信之に家康から褒美が与えられる事になりました。関ケ原で敗れた父の昌幸と弟の幸村を、信之は家康からの褒美に「二人の釈放」を願うのでした。しかし、「それはならぬ」と、家康は首を縦に振りません。そこに、徳川家の譜代家臣だった小松姫の父本多忠勝が願い出て、命は繋がり二人は高野の九度山に幽閉されます。幕府は真田昌幸・幸村親子には隠居を望んでいましたが、信之がなかなか隠居しませんでした。昌幸の死後、幸村は散った部下を集め、大坂夏の陣に臨むのでした。有名な「真田丸」の活躍です。

**〇次回の「幸福師匠おーえん会」の紹介。**

落語や講談といった日本の伝統話芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠おーえん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統話芸を広めて行きます。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統話芸の面白さや意味の深さを知る機会を提供します。

次回は来令和６年６月１日土曜日7時（木戸銭2,000円）から星時で開催されます。「幸福師匠おーえん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、是非、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

幸福師匠おーえん会　代表　坂井至通（12期卒）